黄粱夢

芥川龍之介

盧生（ろせい）は死ぬのだと思った。目の前が暗くなって、子や孫のすすり泣く声が、だんだん遠い所へ消えてしまう。そうして、眼に見えない分銅（ふんどう）が足の先へついてでもいるように、体が下へ下へと沈んで行く——と思うと、急にはっと何かに驚かされて、思わず眼を大きく開いた。

すると枕もとには依然として、道士（どうし）の呂翁（ろおう）が坐っている。主人の炊（かし）いでいた黍（きび）も、未（いま）だに熟さないらしい。盧生は青磁の枕から頭をあげると、眼をこすりながら大きな欠伸（あくび）をした。邯鄲（かんたん）の秋の午後は、落葉（おちば）した木々の梢（こずえ）を照らす日の光があってもうすら寒い。

「眼がさめましたね。」呂翁は、髭を噛みながら、笑を噛み殺すような顔をして云った。

「ええ」

「夢をみましたろう。」

「見ました。」

「どんな夢を見ました。」

「何でも大へん長い夢です。始めは清河の崔氏の女と一しょになりました。うつくしいつつましやかな女だったような気がします。そうして明る年、進士の試験に及第して、渭南の尉になりました。それから、監察御史や起居舎人知制誥を経て、とんとん拍子に

中書門下平章事（ちゅうしょもんかへいしょうじ）になりましたが、讒（ざん）を受けてあぶなく殺される所をやっと助かって、驩州（かんしゅう）へ流される事になりました。そこにかれこれ五六年もいましたろう。やがて、冤（えん）を雪（すす）ぐ事が出来たおかげでまた召還され、中書令（ちゅうしょれい）になり、燕国公（えんこくこう）に封ぜられましたが、その時はもういい年だったかと思います。子が五人に、孫が何十人とありましたから。」

「それから、どうしました。」

「死にました。確か八十を越していたように覚えていますが。」

呂翁（ろおう）は、得意らしく髭を撫でた。

「では、寵辱（ちょうじょく）の道も窮達（きゅうたつ）の運も、一通りは味わって来た訳ですね。それは結構な事でした。生きると云う事は、あなたの見た夢といくらも変っているものではありません。これであなたの人生の執着（しゅうじゃく）も、熱がさめたでしょう。得喪（とくそう）の理も死生の情も知って見れば、つまらないものなのです。そうではありませんか。」

盧生（ろせい）は、じれったそうに呂翁の語（ことば）を聞いていたが、相手が念を押すと共に、青年らしい顔をあげて、眼をかがやかせながら、こう云った。

「夢だから、なお生きたいのです。あの夢のさめたように、この夢もさめる時が来るでしょう。その時が来

るまでの間、私(わたし)は真に生きたと云えるほど生きたいのです。あなたはそう思いませんか。」

呂翁は顔をしかめたまま、然(しか)りとも否(いな)とも答えなかった。

（大正六年十月）

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年10月28日第１刷発行
１９９６（平成８）年７月15日第11刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：平山誠、野口英司
校正：もりみつじゅんじ
１９９７年11月10日公開
２００４年３月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。